

## 竹中二郎先生を憶う

岡 本 舜 三

竹中二郎先生は、昭和 23 年 3 月、本学を停年退職されましてからは、ずっと千葉工業大学教授として学生の教育と研究に尽粋しておられ、かたわら本学にもときどきおいでになっては、わたくしども後輩の働きぶりを、常に変わらぬ温顔をもって楽しそうに眺めて、いろいろと指導をして下さっていました。そういうと

きはきまってお好きなスキーや釣や謡曲のお話がでて、わたくしどもは何度か伺ったことのあるお話をほほえましく拝聴したものでした。それが今年の初夏以来ご不快の日が多くなり 6 月末には胃腸の専門病院に入院手術されるようなことになって、先生のご健康をみなで心配していましたが、手術のあとは気分的にお元氣になられ、快気祝をいただいたわたくしたちは安途の胸をなでおろしたものでした。しかし先生の不屈のご気性も遂に病魔には克ち得ず、秋には急に病が革まり昭和 34 年 9 月 17 日安らかに昇天せられました。

先生は明治 20 年 4 月 17 日東京にお生れになり、第一高等学校を経て、東京帝国大学工学部機械工学科にご入学、船用機関を専修されて、明治 43 年にご卒業になりました。ご卒業後は川崎造船所、早稲田大学、東京帝国大学工学部等に勤務され、昭和 17 年 4 月東京帝国大学第二工学部設立とともに東京帝国大学教授に任ぜられ、応用力学第 1 講座を担任され、同学部の発展に献身的な努力を払われました。同学部における先生の明快なるご講義と深いご造詣の滲みでた材料実験のご指導とは学生のひとしく感銘したところでありま

す。先生はまた材料力学・機械工学の研究分野において巨大な足跡を残され、とくに材料試験方法の確立、鉄鋼の応力-変形、塑性域の生成発達に関する実験的研究における業績は内外の学界のひとしく認むるところであります。今日精密な応力測定や金属の塑性、疲労等の分野において当研究所がいささか自負しうる業

績をあげているのは先生のご薫陶の賜といえましょう。

また先生は東京大学評議員として学校行政の面にも非常な貢献をされ、終戦直後の混乱期にあって、よく本学の正しい進路を守ってゆかれました。

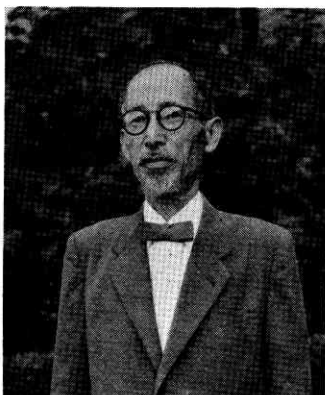
先生の学外での多彩なご活躍については改めて申すまでもありませんが、機械学会会長をはじめ幾多の委員会等において指導的な役割を果たし

斯界に大きな貢献をなさいました。

公的にそのような偉大な業績を残しておられる反面、家庭的にはきわめてよき父上であられたようにお見受けしました。7 人の子福者であられ、全員揃ってすでにご立派に成長しておられることは、先生ご夫妻の最も御満足であったことの一つと思います。あるいはご自慢の種であったかもしれません。

いまやすでに幽明境を異にはいたしました。先生の最も愛された第二工学部の後身たる当研究所が日とともに健全な発達をとげてゆくさまを微笑をうかべて眺めていて下さることと信じます。謹んで先生のご冥福を祈り、哀悼の言葉にかえさせていただきます。

(1959. 11. 12)



故竹中二郎先生